



## Osaka Gakuin University Repository

Title	自己の教育人間学、その輪郭 An Outline of Self-Educational Anthropology
Author(s)	井上 専 (INOUE MAMORU)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 23 巻第 1 号 : 1-18
Issue Date	2012.6.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

## 自己の教育人間学、その輪郭<sup>1)</sup>

井 上 専

### An Outline of Self-Educational Anthropology

INOUE MAMORU

#### ABSTRACT

My recent research can be described as “self-educational anthropology”, because the main aim is to develop an awareness of what kind of person I am and by what means I can improve myself. My deepest interest is to educate myself along the direction of the anthropological research. This paper outlines this research by describing its principal contents.

The current research is scientific in nature, because its results are based on an analysis of facts. How do I distinguish between factual and non-factual information?

Self-improvement entails increasing one’s sense of being vital and sound, which can be achieved by appreciating significant experiences. First, if I can repeat actively appreciating an

- 
- 1) 本稿はすでに公表した以下の三つの文章と重なる部分も多いが、今回のテーマを語る上で必要だと思える加筆・修正をそれらに施すことにより成立したものである。「対話調という文体について——教育人間学探究からの一報告——」（『関西教育学会年報 通巻第34号』、平成22年、pp.16-20）  
「対話調という文体について——教育人間学探究からの一報告（2）——」（『関西教育学会年報 通巻第35号』、平成23年、pp.16-20）  
「教育人間学の主要テーマとしての自分自身」（『関西教育学会年報 通巻第36号』、平成24年、pp.11-15）を参照のこと。  
またそれ以外の筆者の探究成果として以下の文章を念頭に語っている。「異国に住むこと、人の成長——スイス・ヨーロッパをめぐる一つの対話（1）——」（『大阪

experience for more than five years, I can tentatively acknowledge as a fact my self-improvement through the experience; This is because active experience requires more labor and time than passive experience, and therefore, repeating an active experience is difficult if it is not significant enough to increase one's sense of being vital and sound. Second, if I can fully describe and reflect on the experience in a paper, I can again acknowledge the fact that I have achieved self-improvement. This is because describing and reflecting on an experience in writing requires no less labor and time than an active experience, and therefore, it is difficult to realize if the experience is not significant enough to increase one's sense of being vital and sound.

By describing an experience, one can learn whether the experience contributes to self-improvement or not, as long as he or she uses a writing style appropriate to the experience itself. For example, one cannot appropriately describe sensitive factors using only an analytical style. As most of my significant experiences have included sensitive factors and have been formed mainly through my dialogues with other persons, it is appropriate to describe them using a dialogical writing style, which employs common, everyday words. In this sense, papers that describe significant experiences can be considered the results of scientific research based on facts.

As a complete and clear picture as a person is still emerging, and as other writing styles may turn out to be more suitable for describing some experiences, the outline I draw here may be improved in the future.

(See "International Studies" of Osaka Gakuin University, Vol.20, No.2, 2009, pp.35-55, for a further explanation of dialogical writing style.)

---

学院大学国際学論集』第19巻第1号、平成20年、pp.1-20)、「異国に住むこと、人の成長——スイス・ヨーロッパをめぐる一つの対話(2)——」(『大阪学院大学国際学論集』第19巻第2号、平成20年、pp.17-38)、「キリスト教と人間形成——『安らぎ』をめぐる一つの対話——」(平野正久編著『教育人間学の展開』平成21年、北樹出版、pp.283-303)、「『カラオケ』を大学で活用することの意味——体験の実践からの緒論——」(『大阪学院大学国際学論集』第20巻第1号、平成21年、pp.125-145)、「教育人間学とその文体について」(『大阪学院大学国際学論集』第20巻第2号、平成21年、pp.35-55)、「ダイアログへの道——教育学徒の内界巡礼(1)——」(『大阪学院大学国際学論集』第21巻第1号、平成22年、pp.37-56)、「あるがままの自分と成る幸い——教育学徒の内界巡礼(2)——」(『大阪学院大学国際学論集』第22巻第1号、平成23年、pp.19-41)、「エロスとのお付き合い」(『関西教育学会年報 通巻37号』、平成25年、pp.31-35)。

## はじめに

筆者の現在の探究の有り様を言い当てるのに最もふさわしい名称は「自己の教育人間学」であるように思える。それより以前からも筆者は自分の探究を教育人間学探究だと思ってきたが、それは自分の関心がずっと「人間とそのよさ」への問いに結びついてきたからだとも言える。つまり「人間にとってのよさとは果たしてどういうものか、そして人間はどのようなことによってよくなる存在か」、このような問いへの応えを探り見極めたいという思いが強かったということである。この問いへの応えあるいは応えへの示唆を見出したなら、その方向に沿うよう実際に人間を教え育てたいという思いもこの関心と結びついてきた。このような意味で筆者は自分の探究が教育人間学探究だと思ってきたが、以前には「人間」のなかに自分だけでなく様々な他者が含まれていたように思う。それは例えば身近に接するあれこれの若年者・大人や人類的な広がりをもった他者たちであり、したがって筆者の関心にはこれらの他者という人間とそのよさの探究、その教育という部分も少なからず含まれていたわけである。しかし、ここ10年程前からますます「自分という人間とそのよさ」が探究の主要テーマとして浮上するとともに、そこで明らかになったよさの方向へと自分自身を教え導く事へと重点が絞られて、自己の教育人間学と呼べるものが形を成してきたという感を抱いているわけである。

ではこの学の主要な中身はどのようなものであり、それによって現われるその輪郭はどのようなものであろう。このことについて語りつつ、自分で確認したいというのが本稿の主旨である。

### 1、自己の教育人間学への経緯

そもそもどのようにして筆者の探究は自己の教育人間学という方向を取るに至ったのであろう。その大きなきっかけには、自分以外の他者の生涯・探究成果（つまり思想や学説）を自らの探究の主要テーマとしつつ教育に携わることへのわだかまりのようなものがあつたように思う。「人間

とそのよさ」について一定の応えを出した、あるいはそのように見える他者の生涯・探究成果を主要テーマとして、それらを一層理解しようと試みつつその内容を他者に伝達・媒介したり、これに沿うよう他者を教え導いたりすることが全く無意味だと感じた覚えはこれまでない。しかしあれこれの他者の生涯・探究成果の理解に取り組んだとき、自分には十分に理解できない部分が残るという印象が必ずといってよいほど生じた。そしてこの部分は、この他者がその人自身の生涯にまつわる切実な関心から探究を行なっているために生ずるのであり、その他者の関心のすべてが筆者のそれとそのまま重なるわけではない以上、おそらくどこまで行ってもこうした部分は残るだろうという確信めいたものも深まっていった。また例えば、他者の生涯・探究成果の大よそを理解した上で、それを自分自身に適用してみて自分がある程度よくなるとわかったとしても、果たしてどの程度よくなるのか——つまり完全によくなるのか、部分的によくなるのならどの程度よくなるのか——を十分に確かめていないままに、その内容をベースにして他者の教育に携わる覚束なさもまた残った。こうして「本当にその内容通りであると自分で確かめた上でその内容をベースに他者の教育に携わっているのか?」、そのような問いかけにたいして十分応えられていない感がますます募る一方、「人間とそのよさ」について自分自身が十分理解したと思える内容を、自分自身で確かめた程度と範囲内で教育にも適用したいという思いが募っていったわけである。

では他者の生涯・探究成果以外に「人間とそのよさ」についての手がかりが筆者にはもともとなかったのであろうか。他の探究者がそれに言及しているかどうか、しているとすればどのような言い方でなのかは別としても、自分の実感の中になんかはっきりとした手がかりがもともとあったように思える。ひとまずそれを言い表わしてみるなら、「自分という人間にとってのよさとは一層の元気さの実現であり、自分は好きな経験を味わうことによって（そのような意味で）よくなる存在である」、このような手がかりである。ここで言う元気さの実現とは、今より一層の活力、潤い、のびやかさを感じつつ人生を前進させることができるようになることを指している。一層の健全感の実現と呼んでもよい。それは日常の何気ない

折々に、自分が心惹かれる経験、すなわち自分が好きだと思える経験に取り組み、のめり込むほどそれを味わう前後に感ずるようなよさである。このような時、深いときめき感や感動を含んだしみじみとした感慨を感じつつ、筆者は一層よくなり人生を前進させることができると感ずることが多い。またこの時同時に感ずるのは、自分があるがままの自分、すなわち本当の自分自身に一層近づいたと感ずる度合いが増していることである。すなわち筆者にとって「これが本当の自分だ」と思えるような自分に成ることと、自分が一層よくなることとが密接に繋がっていると言ってもよいだろう<sup>2)</sup>。

こういう意味での「自分という人間とそのよさ」の内容を手がかりとして、一層自分がよくなるためにはどうすればよいかを模索しつつ、その方向へと自分を教え導き、育ててゆきたい。このようにして人間と教育についての筆者の関心はますます自分という人間とその教育へと重点を移し、自分自身を主要テーマとする教育人間学、その意味での自己の教育人間学となってきた、ひとまずそう言えるであろう<sup>3)</sup>。

## 2、学問性ための二つの試金石

広く言って、ある探究が学問となり提出されたその成果が学問成果となるための必須要件の一つには探究の実証性、つまり探究が事実に基づいて進められその成果が事実に基づく程度・範囲において提出されているという性格があるように思える。ここで言うところの事実とは実際に生起した事柄、本当にそうである事柄という意味である。逆に言って、ただ思考上・想像上でだけ産み出された事柄はいまだ事実とは言えず、したがって

---

2) 前掲論文「あるがままの自分と成る幸い」を参照。

3) まずもって自分に対して確かめられた内容を、他者に対して自ずと語ったり生き方・行為で示したりすることが、筆者にとっての他者教育ということになる。こうした内容が他者にどの程度伝わるものなのか、そこには絶えず不確定性が伴わざるを得まい。しかし例えば芸術をはじめとしたクリエイティブな分野で、個人的な経験世界を表わした内容が同時に他者にとっての教育的内容となりうるのはまれなことではないであろう。

それにのみ基づいている探究は学問とはいえない。ではこの事実を見定めるのは誰であろう。それは探究者その人であろう。そうでなくてはその事柄は探究者にとって実際に生じたものとは言えないからである。この意味で以前の筆者に浮かんだ問いかけは、自分の探究の学問性への問いかけであったとも言えるだろう。理解しきれない部分が残る他者の生涯・探究成果を自分の探究テーマとして、それを自分に適用したとしても、その他者が意味した通りの意味で自分がよくなるのかを自ら確かめたとは言えず、この探究は正確な意味での事実立脚していないのではないかという問いであったとも言えるからである。

では筆者の言う自己の教育人間学は、どういう意味で学と呼べるのであろう。そもそも事実と呼ばれるものの有り様は学問分野によって様々でありえようが、いずれの場合でも事実と事実ならざるものを判別して選り分ける基準、いわば試金石のようなものが定められていなくてはなるまい。自己の教育人間学の場合、この基準・試金石は第一段階のものとして第二段階のもの二つがあり、それら二段階の試金石による検証をパスしたものが最終的な事実と見定められ、この事実立脚した程度・範囲でのみ探究成果が提出される。この次第について簡潔に述べてみよう。

筆者を元気にするであろうと思える経験、すなわち筆者が好きだと思える経験は一見すると雑多な程あるように見え、その経験を味わって感ずる元気さの有り様、色合いもまた様々であるように見える。では例えば、「自分はある経験によって元気になる人間である」という命題が果たして事実なのか、そうでないのかはどう判別されるのだろうか。このための試金石の第一のものは、その経験を能動的に味わってみる行為——ここではそれを能動的味わい行為と呼ぼう——がどれほど長続きするかを試すことである。この能動的味わい行為とは、当該の経験から距離を取って眺めたり分析したりするような、いわば一歩引いた姿勢で経験を味わう行為——こちらを受動的味わい行為と呼ぶ——とは異なり、身体全体、すなわちできる限り五感をフルにアンガージュさせつつ経験を味わう行為を指している。筆者の経験上、この能動的味わい行為には受動的味わい行為よりも一層の労力がかかり、したがってそのために一層の汗と涙を流すことが

少なくない。それは一層の時間がかかるということでもある。たえず限られた労力・時間しかもたない筆者からすればこのことは少なからぬ日々の負荷となる。しかしこの行為が自分を元気にすることが仮に本当の事柄＝事実であるなら、その経験の与える感動・感慨をもっと味わいたいという思いが自ずと湧き、能動的味わい行為が自ずと続けられる。逆にその経験によって筆者がさほど元気にならなければ、この行為はある期間で自ずと終息を迎えることとなる。決して長いとは思えない自分の人生のなかで、五年間以上に渡ってなんらかのしかたで能動的味わい行為が続けられた経験については、「自分はある経験によって元気になる人間である」という命題は事実であるとひとまず判定されるのであり、そうでない経験については非事実と判定されるのである。

こうして第一段階の試金石を通過したこの命題にはもう一つの試金石による第二段階の判定が待っている。それはこの経験をどれほど形にして表現できるかを試すプロセスである。どのような経験にせよ、それが呼び起こす感動・感慨が大きいほど「この経験はどうしてこれほど私を元気にし、それをくり返し味わいたいと思わせるのだろう」という問いかけが筆者に喚起される。それは広い意味での知的省察行為であるが、この「どうして」という問いは経験の仕組みを知的に一挙に知ったり、その与える感動や感慨の一義的な原因を特定したりしようとする種類のものではなく、したがってその応えもそのような種類のものではない。むしろ経験がなされている場面をありありと思い浮かべるなかで、特にどの辺りにそしてどのような経緯で感動・感慨を感じるのかを捉えようとする問いである。能動的味わい行為を繰り返している折々に、すでにそのような問いかけに応えようと思い巡らしていることが筆者には少なくないが、この行為の途上では実際のところ経験の個々の部分に注意が向きがちである。これに対して、この行為からはひとまずは身を離してあらためて経験の全体像をつかみ、その上でとくにどの辺りに感動・感慨を覚えるのか、どういう経緯や意味で自分にとってこの経験は価値があると感じるのかをクリアーにしてみたいと思う。この際、思い巡らしだけで経験の全体像を十分にクリアーにすることに筆者はしばしば困難を感じてきた。というのも、そう



できるためには経験全体の大まかな輪郭を描き、その輪郭のなかで価値を感じさせる重要点はどこにあるのか、それは他のどのような重要点とどのような関係のなかで重要だと思えるのかといった細部も同時に仕上げ、一定程度整頓された全体とする事が必要だと思えるが、思い巡らしによる思考だけによるならこれらのことが困難だからである。こうして繰り返し感じてきたのは、まだ形になっていないものを一定のまとまった形にして産み出す行為、その意味での表現行為がここでは同時に必要なものであり、この表現行為が省察行為と一体化して然るべきなのだという点である。このような表現行為と一体化した省察行為にはそのための多様な具体的手立て・媒体がありえようが、筆者にとっては言葉というものに勝るものは今のところ見当たらない。言葉による省察行為においては、まず大きく経験全体をくくる輪郭線をタイトルのようなものとして表わし、輪郭線内に含まれる経験内容のうち類似のものと異なるものを選び分け、類似のものが集まる部分を重要点として浮かび上がらせ章のタイトルとなし、そうして浮かび上がった重要点間の関連を明らかにしつつ現時点での筆者の到達点、経験のもっとも肝要点に迫ってゆくような流れをつくるのが可能になる。そうしてできあがった細部と全体像との照合の末、必要なら文章のタイトル、輪郭線を修正するといった作業を繰り返して、こうして自分が価値を感じている場面の有り様をありのままに存分に描きつくせると感ずるからである。このような意味で、筆者にとって省察行為は文章化行為と言い換えることができる。

こうした言葉による省察行為、つまり文章化行為にも能動的味わい行為に勝るとも劣らない程多くの労力と時間が通常必要となる。しかし、その経験が私をよくしているということが仮に事実であるならば、経験内容を文章内に再現しつつ文章を綴っている折々に湧く感動・感慨と、この内容をもっとありのままの形にして目の当りにしてみたいという思いの方が勝って行為が挫折することなく進み、文章はひとまずの完成を見ることができ。こうして文章化行為の可否が、「自分はある経験によってよくなる人間である」という命題が事実かどうかを試し判別するための第二の、そして最後の試金石となるわけである。こうして二つの試金石による試験を

パスした経験については、その命題が事実であると最終的に判定されるとともに、完成した文章はその経験によって筆者が実際にどのようによくなるのかという事実の具体的中身を語りつつ提出された学問成果だと言えるわけである。

しかしこの時点では、「自分はある経験のみによって元気になる人間である」という命題が事実であると言えるわけではない。もしある種類の経験だけで筆者が元気になる人間であるなら、能動的味わい行為の途上でも、文章化行為の途上でも他の経験を味わいたいという思いは湧かず、この場合筆者は全くの「～的人間」（例えば、音楽的人間、信仰的人間等々）であるということすら可能であることだろう。しかし、これまで筆者の実際はこれとは異なっている。ある経験を能動的に味わったり、それについて文章化したりしている途上で、「まだなにか足りない。別のああいいう経験も味わわなくては自分をもっと元気にはならないのではないか」、そういう思いが浮かぶことが繰り返されてきたからである。そこで自分を教え導くかのように、前者の経験と同時並行的に別の経験も味わってみることが前者だけを味わうことよりも筆者を元気にしてくれるかを確かめ、あるいはこれら二つの経験を味わっている途上でも同じような思いが繰り返されるなら別の三つ目の経験も同時並行的に味わいながら、それが筆者を実際に元気にするのかを確かめる。このようにして、5年以上味わい続けられ文章化されたいくつかの経験によって筆者は元気になる人間であることが事実であると判定されてきたわけである。現時点でそれらの諸経験を挙げるなら、旅・異文化経験、信仰経験、音楽・歌唱経験、ちょい悪的遊び心の発揮経験、エロス経験である<sup>4)</sup>。こうした経験にまつわる文章内容から、筆者がどういう経験によってよくなる人間なのかが一歩一歩髣髴としてきたように思える。ではつまるどころ、筆者はどのような諸経験によって元気になる人間なのだろう。これの問いに対しては、それは自分自身にとってもまだ見極められていない、そう応ずる他はない。現時点で見極められた部分の他になお見極められていない部分が現われる可

4) 前掲論文「ダイアローグへの道」、「あるがままの自分と成る幸い」で描かれた経験は、こうした個々の経験より一段ベースに位置する経験だと思っている。

能性が大いに感じられるし、むしろそちらの部分が大きいとすら感じられるからである。この問いへの応えはそれまで文章に成った、例えば10の文章の内容からそのつど髣髴と思ひ浮かべる以外にない。それが筆者が思う正直なところである<sup>5)</sup>。

### 3、文章スタイル・文彩の重要性

ここまで見てきたように、ある経験の内容を文章化することはその経験にまつわるかの命題の事実性を試すための試金石であり、またそれを通過して完成を見た文章は事実には則った学問成果である。しかし、この文章化行為が試金石となりまたそうして出来上がった文章が学問成果となるための不可欠な前提があることを忘れてはなるまい。それは文章で表わそうとする、あるいは表わされた内容が経験内容を過不足や齟齬なく、つまりありのままに表わしていることである。文章のなかに嘘がないことと言ひ換えてもよからう。ある経験内容が実際筆者を元気にしているかを判別するための文章化行為は、それがその経験内容を十分に捉え、掬い取りつつ進行してこそその役割を果たすことができる。しかし仮に、経験内容との齟齬を含んだ文章——例えば、その重要点を捉え逃していたり、逆にそれほど重要ではない点を誇張していたりしている文章——が完成したとしても、そのことによって命題が事実であると確かめられたことにならない。

---

5) ある一つの経験の文章執筆時にはまだ十分価値を感じられておらず、したがってさほど能動的面白い行為で味わっていなかった別の経験がのちに思いの他に価値あるものとして現われることがある。こうして以前まで見えていたその経験の筆者に占める比重が変化したことが明らかになり、したがって経験内容の解釈のニュアンスが変わることは確かにある。それは広い意味での人生の進展によるところの個々の部分の解釈の更新と言えるだろう。しかし、その経験が全く過去のものとなっているわけではなく、その時点でもなお時間と労力を費やしても味わうことで元気が湧く実感が湧く限りは、筆者がその種類の経験によって元気になる人間だということの事実性自体はひとまずは揺るがない。この比重の変化を含めた上で味わい経験を繰り返してその内容を文章にしてみられるかを再び試してみることで、筆者がその経験によって元気になる人間ということがなお事実かどうかを測り確かめることとなろう。

逆に文章が完成しなかったからといってそれが非事実であると確かめられたことにもならない。

この点にまつわって筆者が痛感してきたのは、経験の様式・スタイルに適った文章の様式・スタイル＝文体によってこそ経験内容をありのままに表わすことができるのだから、文体の問題に無頓着であってはいけないという点である。特に指摘しないではいられないのは、論理的な用語によって論理的に展開するいわゆる論説調の文体だけが探究成果を表わす上で正統的なものであり、それ以外は傍流・異端であるとは筆者の場合必ずしも感じられないということである。確かにとある経験が筆者の知的・論理的な部分を中心に形成された経験なら、その内容を論理的な文体——例えば「AゆえにB、BゆえにC」といったようなもの——で語ることはふさわしいことだとに思える。しかし先に例として挙げた諸経験の様式は、筆者にとって知的ファクターだけでなく感覚や感情といった感性的ファクターも含んでいて、なかには狭い意味での感性を超えたファクターを含むものもある。そうした諸経験を論理的な概念、文章運びで語ろうとしても経験の微妙な襞のようなものを掬いきれず、したがってその内容をありのままリアルに描き切ることはできないと感ぜられてきた。それは経験の有り様と文体との間にミスマッチがあるからである、そう解釈する他ない。たとえこのミスマッチに目をつぶるかのごとく文章化を進め、その末いわば辻褃合わせのような文章が完成したとしても、そのことによってかの命題の事実性が確かめられたことにはならないし、逆に文章が途中で挫折したからといって命題の事実性が否定されたことにもならないだろう。上述の諸経験の内容を綴る場合、むしろ平易な日常語によって語る方がそれらの内容を過不足なく掬い取り言い当てるのに適している、そう筆者はこれまで感じてきた。例えば文学作品、宗教的テキスト、詩歌や歌詞のなかには平易な日常語を用いながらもある経験世界を実に上手く言い当てていると感じさせるものがあるように、この種類の言葉で経験を言い表わすことが論説調でそうするより格段に経験内容をありのままに描ける、そう感じてきたわけである。例えば、もはや通常の感性を越えていると思われる内容については、それをほのめかす種類の文彩、例えば隠喩やアナロジーによっ

て当該の内容を行間に漂わせるように表わすことができるとも感じる。

また上掲の諸経験の内容を表わすのに日常語が適していると感じられるのは、それが具体的・個別的な内容の描写に適しているからである、それも解釈できるだろう。論理的な文体は、数々の具体的な内容のうちそれらに共通しないものを捨象し、それらに共通するものを抽出するという意味で抽象的な内容、個人や個別的なケースに当てはまるというよりは、一層多くの人やケースに当てはまるという意味で一般的内容を語るのに適しているとは思う。これに比して上掲の経験内容は、筆者という個別の人間が味わった具体的なエピソードやケースを多分に含んで形成されている。例えば、平易な言葉で語る文学作品がしばしば作者自身の個別的かつ具体的な経験をベースに置いて語っていることが少なくないように、筆者自身の経験内容を語るのに平易な日常語はこの点でも一層適していると思える。このような意味で、上掲の諸経験を語る上で、論理的な文体よりも平易な日常語で綴る文体の方が筆者の経験の有り様に一層沿っていると思えるわけである。

この日常語による文体が、ありのままの経験内容を表わすのに適しているのは、この文体によるなら文章の一部分に創作的・架空的内容を盛り込むことが比較的容易だからであるとも思われる。例えば、筆者は自分の喜怒哀楽の感情やパーソナルなエピソードを含んだ経験内容を、実名を名乗りつつ表わすことにしばしば困難を感じてきた。それは、実名を名のりつつこうした内容を表わそうとしても、当の人物として日常生活を送っている際に筆者が会うあまりにも多くの事どもが胸をよぎり、ある時は気散じのようになりある時は圧迫感で息がつまるようになり、こうしてありのままの経験内容に注意を集中しつつのびのびとそれを描くことに大きな困難を覚えるからである。このような時、一見すると自分とは別の人物のようである、しかもそれは自分自身だということを自分に対して示唆できるような人物——例えば、守井先生という人物、あるいは親しい知人という人物——を言葉によって創作し、その人物に自分の経験を語らせつつ文章を綴ってみることが、経験内容が偽りなくしかものびのびと現われるのを促し、その内容をフルに掬い取って文章化する上で大きな効果を発揮す

る、そう繰り返し感じてきた。つまり、自分に対する虚偽とは思えない範囲内で創作的内容を盛り込むことができる言語が筆者の経験描写には大きな効果をもっていると感じてきた。あいまいなようである分自由度をもつ言語、よい意味での文彩を發揮できる言語が筆者の経験描写には適している。そしてそれは論理的な概念というより平易な日常言語である、そう感じられるわけである。

#### 4、対話調という文体について

これまで筆者は、平常な日常語で一人の人物が基本的にははじめから最後まで語る、いわゆる独話調の文章を頻繁に試みてきた。それは随筆調の文章であったと言えるだろう。しかしその際、この文体のある種の限界のようなものを感じないではいられなかった。それはすなわち、この文体においては（論説調の文体ほどではないにせよ）語りが単線的に進んで最終的な結論に向けて収束してゆかざるをえず、そのことによって経験内容の少なからぬ部分が切り詰められてしまう、そのような感覚によるものであったと思う。こうした折々に、複数の人物がリアクションを投げあうような文体つまり対話調の文体による文章化を試してみると、独話調にはないほど経験が解きほぐされ解き出されるように現われ出る感をもった。こうした試行錯誤のなかで気づいたのは、筆者の経験はもともと対話的なスタイルでなされている部分が多いのであり、だからこそ対話的な文体で文章化することが経験のありのままの内容を語るのにふさわしいのだ、このような点である。では経験が対話的なスタイルでなされているとは一体どういうことであろう。

筆者は上述のような諸経験を味わう折々に、どうしてこの経験は自分を元気にすると思うかを省察しつつ、その内容を語ることが許される場面ならば必ずと他者の前で語ってしまうことが少なくない。つまりそれは、「どの辺りに特に価値を感じ、どのような経緯で自分は元気になるのか」という問いに対するその時点での応えを語るということである。こうした時の他者からのリアクションの種類は、疑問的なものから賛同的なものま

でさまざまである。例えば疑問的リアクションのなかでも筆者がすぐにこれに応答できないような、いわば盲点をつくようなものや、いまだ経験がなされていない部分に触れるようなものに会った場合、「本当にそのようなものなのだろうか」といった問いかけが浮かび、この問いかけを胸に筆者は再び経験に向かう。逆にリアクションが賛同的なものであっても、「ここまでではよいとしても、その先はどうなっているのだろうか」という問いかけを胸に経験に向かうことが多い。いずれの場合も対話的な語りをきっかけに経験へ向かい、そこでなされた経験内容について再び語り合うという往復運動のなかで経験はなされ、展開されている部分が多い。筆者の経験が少なからず対話的スタイルでなされているということの第一の意味はこうである。しかしこうしたスタイルでの経験により、テーマとなっている経験が見極め尽くされることがあるのだろうか。筆者の経験上それは皆無である。むしろ、対話をきっかけに経験を進めるとこれまで見えなかった新たな謎が見えてきて、その謎をクリアしたかに思えると必ずと言ってよいほど別の謎が見えてくる。このように、どうしてその経験が筆者を元気にするのは、どこまでいっても簡単には見極めがたいと感ずるから、実際の対話もまた、経験を一層進めるためのよいきっかけが得られたと思えば、一義的な結論のようなものに行き着く事なく自ずと終息することがほとんどである。これが対話的スタイルで経験がなされているということの第二の意味である。こうした二つの意味で、複数の人物同士のリアクションのやりとりを前面に押し出し、そして結論はなおも開かれているという対話的文体によって省察・文章化を行なう方が、独話調の文体によってそうするよりもその時点での経験内容が解き出されて、筆者はそれを余すことなく掬い取って描き出すことができると感じるのだ、このように解釈できるのである。

このように経験のスタイルが対話的文体に合致しているからといって、実際に行なわれた他者との対話をそのまま文章にすれば経験を過不足なく、しかもその全貌を語れるのかと言えば、必ずしもそうとは言えない。むしろ実際行われた対話内容に対してときに大胆な創作的所作を施し、これによる内容を盛り込むことが経験の叙述に大きな効果を発揮するのであ

り、これらのことは対話調の文章の方が実現されやすい、そのように感ずることが少なくない。それではそのような創作的所作・内容はどのような有り様をしていて、それはどのようにして経験の叙述に効果があるのだろうか。

先に述べたように省察・文章化行為には、全体を大づかみに捉えた後経験の重要点を発見しつつ現時点での到達点に次第に迫ってゆくという一連の流れのような過程があるが、実際の対話でこの流れがすぐに実現されることは皆無であると言ってもよい。それは、対話がなされる現実的な諸制約——その主なものは問答相手、対話が行われる時・場所＝シチュエーション——によるところが大きいように思われる。例えば筆者と同程度に経験を味わってきた問答相手に恵まれて対話が始まり、重要点が次第に浮かび上がってきたからといって、時間的な制約のために対話を中断せざるを得ない場合がある。この時間的制約はどれほど存分に経験について語ることが許される場所かという場所的制約としばしば結びついている。こうして仮に対話が一度中断されれば、同じ相手と中断した地点から対話を再開できる機会は簡単には訪れない。そうかと言って別の問答相手と一層好ましいシチュエーションで対話の続きを試みたとしても緊密に噛み合った語り合いができるとは限らず、むしろすでに一度クリアした地点に引き戻すかのように語り合っただれ程前回の続きを始められるか、あるいは別の観点から新しい展開の語り合いができるか等を手探りしつつ語り合わねばならない。このような意味で、問答相手やシチュエーションに応じて語りを調節せざるを得ない現実的な対話では文章に必要な流れがそのまま実現する場合は皆無に等しいというわけである。したがって省察・文章化行為の際には、様々な問答相手と様々なシチュエーションでなされた対話内容を想起しつつも、それらの継起を並べ替えて流れを創ることが必要となる。それは広い意味でのストーリーラインを創る行為、筋立て行為と呼べるだろう。この行為とそれによって創られる筋立ての有り様は、例えば以下のようなものである。文章の始めの部分では、当該の経験と別のあれこれの経験との類似点・相違点について語り合われた際の対話内容を多く盛り込むことでその経験に話題を焦点づける。次に筆者が他者から受けた疑



問的リアクションを含む対話内容を多く盛り込みつつ、問答相手の疑問を少しずつ解きほぐしながら重要である点を次第に顕わにしてゆく。徐々に賛同的ないし発展的なりアクションを盛り込むことで、問答相手の納得度が増すとともに、現時点で最も肝要だと思える部分に迫り、それを描いてみせる。はじめより経験内容が明らかになったことを人物同士が確認し合い、しかしなおも見えていない点、分からない点にも言及しつつ文章が終息を迎える。このような有り様である。

対話調の文章のなかでは、語り合う登場人物、対話がなされるシチュエーションにもそれぞれ独自の有り様で創作的内容を含み込むことが比較的しやすく、それが経験内容のありのままの叙述に効果を発揮するように思われる。これらに共通して言えるのは——例えば真空のような空間で行われる言葉だけのやりとりではなく——具体的にモデルとなるものを思い浮かべそれを立体的に描くよう努めつつ文章化を進めることが、現実に行った対話だということを自分に確認する上で欠かせないということであり、しかしそれらが実在のものだという事を過度にリアルに示すと、それにまつわるあまりに多くの事柄が胸をよぎって経験そのものの叙述が遮られてしまう感を抱くということである。したがって、実在の人物・シチュエーションを示唆しつつも、誰かがいつかどこで行った対話という設定を創りあげることが経験の叙述に効果的だと解釈される。

これまで筆者は必ずと言ってよいほど文章の中に自分自身をモデルとして、その時点での自分の経験内容とその解釈をセリフとして述べつつ対話を主導する人物を登場させてきたが、この人物は一見筆者とは異なる人物でありながら筆者自身を示唆する人物として登場させてきた。それは以上のような意味においてである。では問答相手についてはどうであろう。問答相手のモデルとなるのは自分が接した中でわけても筆者が愛着を感じる人物——それは家族の者、10年程前の自分、別の愛着を感じる人——であり、しかもその人物を示唆しつつ別名の人物であり、この人物に筆者がこれまで受けてきた多様なリアクションをセリフとして代表させて語らせることが多い。これは、文章執筆時になお筆者の心に残り文章に表わすに値すると思われるリアクションの内容は——それが疑問的なものであろう

と賛同的なものであろうと——筆者の経験を一層進める上で大切なインパクトをもったものばかりであり、その意味で筆者自身と分かち難く結びついている。したがって愛着を抱く人物をモデルにした問答相手を文章内に登場させることが、経験のリアルな叙述に効果を発揮するのだ。そう解釈できるだろう。また対話が行なわれるシチュエーションについて言えば、比較的緊密かロングランの対話が実現した時のものがそのモデルとなる場合が多いが、それを念頭に置きつつ、一層理想的なシチュエーション——つまり当該の経験にまつわる内容を目の当りにしたり、経験を実際に行なったりしながら語り合えるようなもの——を創りあげることが、できる限り単刀直入にその経験について叙述する上で大きな効果を発揮するようになる<sup>6)</sup>。

## おわりに

ここまで自己の教育人間学の輪郭を描いてきたのであるが、この輪郭は今後も変わる可能性はないのだろうか。変わる可能性があるとするればそれはどのような点であろう。自己の教育人間学と呼ぶ限り、この学の主要な探究テーマは自分自身であり続けるはずであり、それどころか筆者の探究は今後も自己の教育人間学でしかあり得まい。なぜなら、それは筆者にとってこれ以上の納得ゆくものがないような最終的な到達点だと思われるからである。探究内容を表わす文体がこの学に対して占める重要性もまた今後も変わることがないだろう。しかし個々の文体という点では少し事情が異なっているように思える。今後も対話調をメインにしながらも、（すでにいくつかは試してみた）告白調、日記調、詩歌調、往復書簡調等をもっと試してみる余地を感ずるし、これらの文体を複合的にふくむことができしかもダイナミックな筋立ての可能性を秘めた文体が必要となる可能性も感じる。

このような様々な文体の新たな可能性の発見や、まだ見えていない自分

---

6) 文章における創作的所作・内容の詳細については、前掲の「対話調という文体について—教育人間学探究からの一報告（2）—」を参照。

自身の部分への気づきを含みつつ、自己の教育人間学には予期できないほど波乱万丈の展開が待ち受けている。そのように思えてならないのである。